

### ジョイスの時代のダブリン(1)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

52

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2006-03-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004124>

# ジョイスの時代のダブリン(1)

## Dublin in Joyce's Time (1)

結城 英雄  
HIDEO YUKI

### はじめに

本稿の目的は、ジェームズ・ジョイス（1882-1941）の『ユリシーズ』（1922）を中心に、1900年前後のダブリンの生活を描くことである。風土・歴史、家庭生活、経済、政治、宗教、医療・福祉、教育、女性、科学・思想、娯楽、性風俗、文学といった項目を設定し、当時の人々がどんな暮らしをしていたのか、どんなことを考えていたのか、といったことをつづさに紹介するつもりである。

『ユリシーズ』は1904年6月16日のダブリンを描いた小説である。主要登場人物は、文学青年のステイーヴン・ディーダラス22歳、新聞社の広告取りをしているレオポルド・ブルーム38歳、ソプラノ歌手のモリー・ブルーム33歳の三人。物語には彼らの赤裸々な意識がありありと描かれ、まさしく時代のドキュメンタリーであり、ホメロスの『オデュッセイア』を下敷きにしたダブリンをめぐる一大叙事詩でもある。実在の人物が登場し、細密なダブリンの地誌を背景に、歴史的な出来事が話題にされ、排泄や性や食事などもすべて含まれている。

『ユリシーズ』は歴史ではないし、ましてやブルーム、モリー、ステイーヴンの三人が実在していたわけではない。それでもこの三人の登場人物の意識や行動はささやかな物語ではない。彼らの一日は生の記録であるかのように読者の前に立ちはだかっている。彼らは歴史の証人であると言っても過ぎることはない。ジョイスはダブリンに彼らの物語を貸し与え、同時に彼らの意識に時代精神を重ねたのである。彼らが無意識に発する言葉も時代と無縁ではない。

また1904年6月16日は単独な一日でもない。現在は過去の未来であり、現在は未来の過去である。『ユリシーズ』を読むなら、過去から未来へと連結する物語＝歴史にも遭遇するはずである。人物の意識には過去となった物語が沈殿しているし、その意識の中のある物語が未来になってゆく。主要登場人物の会話や意識から、イギリス支配下のこれまでのアイルランドの歴史が語られているであろうし、その後のアイルランドの行く末に関わる事件である1916年の復活祭蜂起、ならびに1922年の自由国成立などの潜勢力も示唆されているであろう。ジョイスが時代の文脈をどのように捉えていたのかも考察することにする。

さらに物語は国家と無関係ではない。個人の意識は共同体の意識と連結している。物語と国家については以下の指摘もある。(1) 物語は国家と同じく想像上の共同体に関わる（ベネディクト・アンダーソン）、(2) 物語は国家の無意識と関わる象徴的行為である（フレデリック・ジェイムスン）、(3) 物語は国家の抵抗の形式である（ホミ・バーバ）、(4) 物語は国家と同じくポリフィニーで構成されている（ミ

ハエル・バフチン)。いずれの指摘も『ユリシーズ』と無関係ではない。この小説はまさしくダブリンという実在の都市を前提に書かれ、民族に関わる問題を扱っている。文化を論じることはまさしく国家の良心に関わる問題でもある。本稿では民族をめぐるジョイスの立場についてもいささかの結論を導くことにしたい。

ジョイスの主要な作品としては『ユリシーズ』以外に、『ダブリンの市民』(1914)、『若い芸術家の肖像』(1916)、『フィネガンズ・ウェイク』(1939)がある。いずれも大陸を移り住みながら書かれ、いずれもダブリンを舞台にしている。自らを作りあげた都市を書くことにより、自らがいかに作られたかを確認したかったのであろう。ジョイスにとり、作品を描くことは自らがいかに生成されたかを検証する手段でもあった。『ユリシーズ』と同時にその他の作品も利用することにする。

## 風土・歴史

### ブルーム一家

レオポルド・ブルームは、1866年5月6日、ダブリン市内のユダヤ人居住区、克蘭ブラシル通り52番地で生まれた。父親はハンガリー系ユダヤ人のルドルフ・ヴィラーク、母親もハンガリー系ユダヤ人の血を引くエレン・ヒギンズ。母親はカトリックであるが、父親はプロテスタントに改宗しており、ブルームもプロテスタントの洗礼を受けた。

父親はユダヤ人の常として行商を営み、晩年にはホテルも所有した。ブルームはその父親から大陸での放浪やユダヤ教のことなどを聞かされ、また一人っ子であるために母親の愛を一心に集めて成長する。こうして1880年、彼はプロテスタント系の学校、エラズマス・スミス高校を14(16?)歳で卒業する。彼は父親を継いで始めた行商を振り出しに、服地店や文具店での外交員を経験し、政治にも関心を示す。

一方、モリー・ブルームは、1870年9月8日、スペイン南端に位置する英国の直轄植民地、ジブラルタルで生まれた。父親はイギリス陸軍のジブラルタル要塞勤務の特務曹長、ブライアン・クーパー・トウィーディ。母親はルニタ・ラレドというスペイン系ユダヤ人。両親は正式な婚姻関係にはなかったらしい。母親はモリーが物心ついたところから行方不明である。

モリーがブルームの家から遠からぬダブリン市南郊へ移住するのは、1886年ごろのこと、父親が陸軍を退役したことによる。彼女には歌の才能があり、このころから歌手としても知られていた。彼女がどのような教育を受けたのか明らかではないし、スペイン語の知識もほとんどないが、ジブラルタルへの郷愁は強い。また父親の影響であろうか、英国軍人への憧れもある。

二人の出会いは1887年、近隣のディロン家のパーティに招待された折のことであった。電撃的であったらしく、数分間、お互いに見つめ合った。ブルームはモリーの豊満な肉体とともに「ユダヤ女の顔たち」(18.1184)に魅了され、モリーの方もブルームの端正な顔立ちや精悍な様子に心を動かされたらしい。こうして二人は熱烈な恋愛の末、1888年10月に結婚する。ブルーム22歳、モリー18歳であった。

2人はユダヤ人仲間のいる地区に新居を構え、翌年長女ミリーも誕生する。楽しい生活の始まりであ

った。数々の思い出にも溢れている。しかしその後ブルームが転職し、一家は親しい仲間のいる居住地から離れざるを得なくなり、夫婦の間にも暗い影が忍び寄る。長男のルーディが生後11日目に亡くなったこと、さらにはブルームが無職になったことも大きな原因である。性生活にも歪みが入る。それでも、結婚生活16年が経過し、1904年6月16日を迎える。娘も遠方で写真屋の見習いになり、夫婦2人の生活が始まったところである。

以上がブルーム一家の簡単な歴史である。ブルームもモリーもダブリンの市民であると同時に、異国からの移住者としての意識(14.937/15.942)も合わせ持っている。この一家を中心にダブリン市民の暮らしの諸相を考察しよう。その手始めに彼らを取り巻くアイルランド、さらにその都市ダブリンの風土・歴史を検討しておきたい。

### アイルランドの風土

まず地理的に見るなら、アイルランドはブリテン島の西に横たわる、北海道よりもほんの少し大きい島である。北緯51度26分から55度21分、西経5度20分から10度26分。ラテン語で「ヒベルニア」(7.1)と呼ばれた。四方をノース海峡、アイルランド海、セント・ジョージ海峡、大西洋という「四つの海」(12.1829)に取り囲われている。島全体の形状は、平面図では「子熊」にたとえられ、立体図では沿岸部、沿岸近くに点在する山脈、中央部の平原といった地勢が「洗面器」を連想させる。西部の沖合にはセーターで有名なアラン諸島の他、ブルームが聖ヨセフ公立小学校の前で耳にするイニシュターク、イニシャーク、イニシュボフィンといった島々(4.138)もある。

900メートルを越える山はほとんどない。イエイツが好きであったというスライゴーのブルベン山は526メートルであるし、ブルームと同名のブルーム山脈の最高峰は527メートルである。川は主に山脈を源流に海に注いでいる。ダブリン市を貫流するリフィ川はウィックロー山脈から、アイルランド最長のシャノン川はキャヴァン州の山からそれぞれ発している。全体的に平坦であるために発電には不向きであるが、隆起や褶曲による急峻な渓谷も多い。また湖沼はイギリス諸島最大のネイ湖を始め無数にある。ミリーが友だちと出かけるオーエル湖は、マランガーから近いウェストミーズにある。イエイツの詩「イニシュフリー湖島」はスライゴーのギル湖に浮かぶ島、イニスフリーを歌っている。聖パトリックが練獄と地獄の光景を見たと言われる地、聖パトリックの練獄(12.1458-59)はドネゴール州のデルグ湖に浮かぶ聖人たちの島にある。

このように自然に恵まれたアイルランドには景勝地も多い。「精神的には生まれながらの冒険家」(16.502)であるブルームが訪れたいと思う地からいくつか列挙するなら、モーハーの断崖、コネマラの荒野、ネイ湖、ジャイアンツ・コーズウェイ、ティッペラリーの黄金渓谷、アラン諸島、ミーズ州王室領の牧草地帯、鮭の瀬、キラーニーの沼沢地などがある(17.1974-78)。彼によると「観光旅行はもちろんまだ、言わば幼年期にある」(16.564)が、実際には、1850年以降、鉄道などの交通手段が整備されるにつれ、旅行案内書の数も八百を越え、アイルランドのすばらしさが喧伝されていた。カメラの普及も旅行熱を煽り、狩猟の用語から転用された「スナップショット」(1.686)という言葉も流行語になっ

ていた。

幸い、北樺太と同緯度にありながら気候も温和である。スティーヴンが述べているように、「アイルランド全土が（暖流の）メキシコ湾流に洗われている」（1. 476）ためである。南北により多少の違いはあるものの、1月と7月のダブリンのそれぞれの最高と最低の平均気温は8度と1度、20度と11度であり、年平均気温も9度ほどであった。氷が張ることはほとんどない。ブルームやモリーが1893年を記憶の拠り所としているのは、その年の2月、異常な寒さに見舞われ、めずらしく運河に氷が張ったことによる。その反面、雨天の日も多く、1904年の降雨日は198日であった。「いいおしめりで」（2. 286）というのはアイルランドでは一般的な挨拶であった。

だが、大地はあまり肥沃ではない。オーエル湖を頂点としてダンダークとダブリン南部を結ぶ東部三角地帯、ティッペラリーからリムリックに至るマンスターの黄金地帯、シャノン川沿いの地域、コーク州、アルスターの東部などを除くと農耕には適さない。国土の約7分の1の面積に亘って、いわゆる泥炭（PEAT）が地表を覆っているからである。泥炭は燃料としての役割を果たし、一緒に埋蔵されている木を使用してロープが作られるが、植物の生育を阻んでいる。

鉱物資源の埋蔵量も少ない。自国びいきの民族主義者たちはアイルランドの豊かさを鼓吹する（第12／16挿話）が、産業に必要な石炭でさえイギリスから輸入するほどであった。森林も少ない。エリザベス女王治政下には造船のため、さらに1882年に土地購入法案が施行され、伐採が進んだためである。1904年における森林面積は国土の1パーセントほどで、植林を主唱する民族主義者もいた（12. 1262）。

ちなみに、「未耕地」とは1903年に出版されたジョージ・ムアの短篇集の表題である。この言葉は当時のアイルランドの国土の状況を巧みに要約している。開墾されていない土地が多かったのである。アイルランドは牧畜を中心とする貧しい農業国ではなかったろうか。

## アイルランド民族

ひるがえって、このアイルランドには、紀元前6世紀から4世紀ころにかけて、大陸から渡来したケルト民族が定住し、独自の文明を形成していった。彼らはミレジア族（12. 372）と呼ばれ、スペイン経由でやって来たとされている。そのはるか以前に先住民族が暮らしていたことはニューグレインジの円形古墳などに明らかであるし、彼らが来島する直前にもフォールボルグ族やダナン族がいたらしい（『若い芸術家の肖像』以下『肖像』）こともアイルランド神話で示唆されているが、いずれも定かではなく、彼らミレジア族がアイルランド人の先祖とされている。彼らはゲール語を話し、ドルイド教を信奉し、初期のアイルランド文字とされるオガム文字（17. 773）を発達させた。

強大な権力者がいたわけではない。しかしダブリンの北西36キロメートルの地に、150メートルほどの小高い丘がある。肥沃な東部三角地帯の一角にあり、タラの丘と呼ばれ、全アイルランドを治める上王が戴冠する最も神聖な場所と考えられた。三世紀中ごろコーマク・マクアートはこの地に学校も創設したとされる。各地に割拠する軍雄が夢見た地であったのだろうか、その後のアイルランド人の精神的地理学の中心ともなっている。スティーヴンは、アイルランドから亡命する目的をめぐり、「タラへ行く最

も近道はホーリーヘッド経由である」と逆説めいた主張をしている(『肖像』)。そしてマーガレット・ミッチェルの小説、『風とともに去りぬ』では、アイルランド移民であるスカーレット・オハラに住む町の丘にタラという名が冠せられている。

キリスト教への改宗は聖パトリックが来島した五世紀初頭のころとされる。彼の布教はドルイド教と拮抗することなく、キリスト教はまたたく間に広まり、各地に修道院が建てられた。アイルランドが「聖人の島」(3. 128)とか、「聖人と賢人の島」(12. 1642)とか呼ばれるのは、その後の各修道院での熱心な研鑽、ならびに大陸などへの真摯な布教活動による。それはコロンバヌス、フィアクル、スコトゥス(3. 193)といった名前を挙げるだけで十分である。『ケルズの書』(17. 755)などの豪華な写本、ハイ・クロスと呼ばれる丈の高い石の十字架の遺跡などにキリスト教の発展が忍ばれる。

アイルランドはその後も大小封建諸侯の相争うままであった。アイルランドがアルスター、レンスター、コナハト、マンスターの四地域に分けられるのはその名残である。八世紀以降にはヴァイキングの侵寇を受け、彼らとの同化も行なわれた。ラウンドタワーと呼ばれる円形の塔は当時の遺物である。だが1002年、マンスターの王であるブライアン・ボルー(17. 419)が上王になり、国家としての統一を形成する。さらに1014年、彼は支配権を強化するために、ヴァイキングと与するレンスターの王モール・モルダをクロンターフの戦いで打ち破る。この戦いでボルー自身も死亡し、彼の王朝も弱体化するが、以降アイルランドでは王権が強化されることになった。

しかし12世紀半ば、些細なことでアイルランドはイギリス支配下に置かれることとなった。アイルランドを二分していたレンスターの王ダーモット・マクマローとブレフニー領主ティアノン・オロークが反目し、マクマローがオロークの妻ダーヴォーギラを奪い、よってマクマローがオロークの攻撃を受けた。その結果、マクマローはイギリス王ヘンリー二世(在位1154-89)の援軍を求め、アイルランドは自らの手でイギリス支配への道を開いてしまったのである(第2挿話)。ヘンリー二世は、イギリス出身のローマ教皇のハドリアヌス四世からアイルランド統治の勅書を与えられていたこともあり、ノルマン貴族のストロングボウ(3. 259)を派遣し、1170年にアイルランド支配を確立することになった。

その後しばらくの間、イギリスのアイルランド支配は進まず、ノルマン貴族がアイルランドで力を握る。彼らは「アイルランド人以上にアイルランド的」(7. 100)と呼ばれるほど地元と同化した。しかしヘンリー八世(在位1509-47)が1536年、アイルランドの教会と国家の長であることを宣言することになる。こうしてイギリスの政治と宗教両面からのアイルランド支配が整備される(第14挿話)。エリザベス一世は支配者たちのための大学トリニティ・コレッジを設立し、肥沃なアイルランド北部に入植者を送り込んだ。そして清教徒革命の指導者、オリヴァー・クロムウェルは反対勢力を残酷非道に処罰した。さらに名誉革命の際、オレンジ公ウィリアムがジェームズ二世に味方するカトリックの軍団をポイン川の戦いで壊滅させ、イギリスの支配を徹底した。反勢力側で戦った人の中にはフランスやスペインに亡命した者(wild geese)も多い。以降アイルランドは完全にイギリス支配下に置かれることになり(第14挿話)、1801年には、アイルランド議会がウェストミンスターに併合させられた。こうしてアイルランドは「グレート・ブリテンならびにアイルランド連合王国」(12. 294-95)の一部になる。

ところで、当時のイギリスはフランスやスペインといった大陸のカトリック教国と敵対関係にあり、隣接する同じカトリック教国のアイルランドは、国際関係上、イギリスの「アキレス腱」(16:1003)的な存在であった。1798年にはフランスと共謀した蜂起も起こっている。こうして19世紀、イギリスは、ヨーロッパ情勢を見据えながら、アイルランド支配をさらに強化する。そしてイギリスのアイルランド支配は彼らのアイルランド人観によって正当化されていた。アイルランド人は劣等民族であり、文明人であるアングロサクソン民族のイギリスの支配下に置かなければアイルランドは無秩序に陥る、そう考えられたのである。とりわけ民族主義運動が盛んな1860年代にはその考えは強まった。

たとえば、野暮なアイルランド人の表象として「ステイジ・アイリッシュマン」とか「パディ」という紋切型のイメージが古くからあった。だが、L・P・カーチスがその著『猿人と天使——ヴィクトリア朝の戯画に見るアイルランド人』で説得的に語っているように、1860年代にはさらにキャリバン、フランケンシュタイン、ヤフー、ゴリラといったアイルランド人観が出来上がっていた。『パンチ』などの雑誌に掲載されたアイルランド人は、事実、猿のような鼻、長い上唇、大きな飛び出た口、突出た下顎、傾斜した額といった相貌である。このイメージは民族主義運動の高まりの中、ダーウィニズムの浸透とともに生成され、カーライルやミルといった文学者もその流布に貢献していた。イギリス人の精神には人種論と帝国主義が分かち難く結び合わさっていた。

その一方、アイルランド独立運動が盛り上がった20世紀初頭、アイルランドの民族主義者の間でもアイルランド人の定義をめぐる論争が、アーサー・グリフィスの創刊した『ユナイテッド・アイリッシュマン』紙上で起こる。「民族とは何か」(12.1419)という議論である。この論争においてはアイルランド人をケルト人とする主張がなされ、ユダヤ人など少数派も排除された。シン・フェインを組織したアーサー・グリフィスなど名だたる民族主義者が反ユダヤ主義を標榜したことは、銘記しておかなければならない。ブルームが酒場で民族主義者の「市民」からユダヤ人として誹られるのはそうした状況を背景にしている(第12挿話)。この思考様式は根深いらしく、1945年のヒトラー自殺の際には、アイルランド共和国の首相デ・ヴァレラ自らがドイツ大使館に出かけ、哀悼の意を表しているほどである。

だが、これまでの歴史を見ると、アイルランド人が様々な人種の複合であることは明らかである。イギリス人対アイルランド人という単純な境界は設定できない。民族運動を指導したパーネルにしてもイギリス系アイルランド人であるし、ジョイス自身にはノルウェーの血が流れているだろう。その限りでは、アイルランドの民族主義者もイギリス側と同一の人種論を展開していることになる。自民族中心主義に拠って立つ「われわれ/かれら」という二項対立論理に基づき、「われわれ」が常に「かれら」よりも優位に置かれたのである。人種論の陥穽を克服するには、自ら抱え込んだそうした論理を打破する必要もある。

### イギリス支配下のアイルランド

しかし、アイルランドは、12世紀の末から実に700年以上もの間、イギリスの支配下に置かれてきた。その間、アイルランドのカトリック教徒は様々な差別や不利益を被ることになった。スティーヴンはア

イルランドの歴史を「悪夢」(2.377)と捉え、大英帝国のことを「大野蛮帝国 (brutish empire)」(15.4569)と呼んでいるが、彼の肉体にもイルランド人としての「飢え、疫病、殺戮」(3.306)の血が流れているのだろう。

まず、ポイン川の戦い後の1691年のリムリック条約(12.1380)の締結以降、イルランドのカトリックに対する宗教的・社会的・政治的な制限、いわゆるカトリック刑法が課せられた。イルランド語を使用することやイルランド風の服装を禁止され、議会や軍隊に関わることができないばかりか、法律職や公職にも就くことができず、プロテスタント側のイルランド教会の10分の1税まで課せられた。その後1829年、ダニエル・オコネルの奮闘によりカトリック解放令が成立し、差別が撤廃されたが、しかし刑法の後遺症は残った。17世紀初頭にはカトリックが所有していた土地は90パーセントであったのが、1778年にはわずか5パーセントに過ぎなくなっていた。

そして19世中ごろの大飢饉(第2挿話)も、イギリスのイルランド支配と無関係ではない。その原因は、イギリスの無策というか、イルランド蔑視によるところが大きかった。イルランドの農民は、自らが生産した小麦をイギリスに輸出しながら、それでいてじゃがいもの飢饉のために苦しんでいたのである。飢饉による死者数は80万人にもものぼり、さらにイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどへたくさんの人々が移住し、その後も移住は継続されていったのである。その結果、1845年に約830万人いた人口も1851年には約650万人に減少し、そして1904年には約440人になる。大飢饉は結婚などを含め、イルランド社会に様々な構造的歪みを作り出すことになった。

産業においてもイルランドはイギリスからの弾圧を受けていた。これは自国の産業を保護するため、イギリスが自国との競争に関わるイルランドの産業を抑圧したためである。とりわけ、17世紀末から18世紀にかけては、リネン工業と畜産加工業以外は抑圧された。しかもそうした限られた産業でさえ、産業革命による機械化により、イギリス系の移民が入植した北のアルスターで栄えたにすぎない。イルランドはイギリスにとり至便な農業国であり、肉を調達する冷蔵庫であったのだろう。

イルランドのカトリックはイギリスの支配にただ忍従していただけない。古くから秘密結社が組織され、フランスからの援軍を期待しながら蜂起が繰り返されもした。「黒髪のリザリーン」(12.190)や「貧しい老婆」(1.403)といったイルランドの表象には、民族主義者たちの独立への願いが仮託されてきた。そしてこうした苦難の歴史をたどって、イルランドは1922年に自由国、そして1949年に独立国となり今日の地位を獲得する。しかし北部六州がいまだにイギリス領のまま、南北統一を主張するIRA(イルランド共和軍)によるテロ行為が行なわれている。イギリス支配の傷は深い。

歴史は民族の記憶であり、無意識のうちに言葉の断片に刻み込まれている。たとえば、輸出のために港へと誘導される牛の大群を前にしたジャック・パワーは、すかさず「まるで移民だな」(6.389)と口ずさむ。ブルームも墓場で鼠を目撃し、「あんなやつなら人間ひとりくらいたちまち片づけてしまうだろう。きれいにしゃぶって骨だけにする」(6.980)と想像する。イルランドの人々の精神には、1845年に始まった大飢饉とそれに伴う移民のことが、ほとんど自覚なしに沈殿しているのだろう。



## ダブリンの風景

さて、ダブリンはそうしたいまだイギリス支配下にある植民地、アイルランドの都市であった。北緯53度20分、西経6度17分。アイルランド島の東端に位置する。ダブリンとはゲール語で「黒い水のたまり」の意である。ヴァイキングの砦のあったリフィ川とポドル川（10.1196）の交流するあたり、現在のウッド河岸とダブリン城近辺に、ピートによる黒い水が流れていたことにちなむ。古くはプトレマイオスにより「エブラナ」（12.83）と呼ばれたし、スティーヴンも「キリスト教世界の七番目の都市」（『肖像』第五章）と豪語する。

生命の川（アンナ）リフィ（8.80）が都市を二分する形で流れ、街のそれぞれ南北の外周部は大運河とロイヤル運河がめぐらされ、運河に沿ってその内側にはそれぞれ環状道路が作られている。都市の中心部の多くは碁盤目状に区画され、公園も配置され、古典的なジョージ朝様式の税関、アイルランド銀行、四法院といった建物が都市に趣を添えている。かつてダブリンが城塞都市であったことを示すマイカン教会の「望楼」、あるいはトリスタンとイゾルデの伝説の舞台である「イゾルデの塔」が立っていたという旧跡（12.1455）もある。

ダブリンはロンドンと同じ自治都市としての地位にあり、ロンドンに次ぐ英国第二の都市として華やかな時代を経験したこともある。だが1801年にアイルランド議会在イギリス議会に併合されて以来、ダブリンは凋落の一途をたどった。1871年に第六位に転落し、1891年にはアイルランド最大の都市としての地位もベルファストに奪われ、そして1900年前後には「麻痺」した都市になっていたのである。ダブリンは「首都の仮面」（「レースの後で」）を纏っているに過ぎない。このダブリンを評して「色褪せた都市」とか「罷免された都市」と呼ぶ人もいる。

たとえば、人口は1851年から1901年までにはほとんど変化がない。1901年に190,638人に増加したのは隣接する地区の東クロンターフ、西クロンターフ、ドラムコンドラ、グラスネヴィン、ニュー・キルメイナムを財政難から併合したことによる。1851年と1891年を比較すると、むしろ158,361人から154,001人へとわずかながら減少している。これはベルファストとはきわめて対照的であり、ダブリンの産業不振を如実に物語っている。そして産業不振を背景に、結婚難や公衆衛生の不備による死亡率の高さなども併発していた。

## 植民地としてのダブリンの地理

ダブリンがイギリスの植民地であったことは当時の地図を見れば一目瞭然である。まず、ダブリンの通りや建物名はイギリスにまつわるものが多かった。市長公邸、ロンドン橋、コンスティチューション・ヒル、スミスフィールド、ワットリング通り、ホレス通りなどといったロンドンに倣った名称にあふれ、アイリッシュタウンなどという地名が存在する一方、グレイト・ブリテン通りやリトル・ブリテン通りといった通りもあった。そして通りの至る所に、オコネル、パーネル、ムーアといったアイルランド人のみならず、ネルソン、ビリー王、ヴィクトリア女王といったイギリスの著名人の銅像も多く立ち並ん

でいた。

また、イギリス国王を表象する「王立」(ロイヤル)という言葉が様々な建物に冠せられている。王立病院、王立大学、王立ダブリン協会、王立外科大学、王立音楽院といった具合である。同様に運河、兵舎、ホテルのみならず、郵便や警察などの組織名にも「王立」が使用され、イギリス国王の支配下にあることを暗示している。

さらに、兵舎としてリネンホール、ベガーズ・ブッシュ、ロイヤル、リッチモンド、マールボロ、ポートベロー、ウェリントン、アルドバラが市を取り巻くかのように点在していた。これらの存在はダブリンが守備隊駐留都市であることを示しているが、同時にダブリンを拠点としてアイルランド全土も統括できる仕組みにもなっていた。有事の場合には、イギリスからの援軍がダブリン港に上陸することもできたらうし、地方に放射線状に広がる鉄道を利用することもできた。

アイルランド銀行も歴史を伝えている。これはアイルランド議会のあった建物である。1800年に連合法が成立した後、議会であったことを示す装飾品を排除するという条件で販売された。しかし奨学金を受け取りに出かけた際にステイーヴンは父親からその過去を想起させられている(『肖像』第二章第五断章)し、アイルランド自治を支持する新聞、『フリーマンズ・ジャーナル』はアイルランド銀行の太陽が昇る図案を掲載していた(第4挿話)。

そして何よりも象徴的な存在がダブリン城である。ここは総督を中心とするアイルランドの行政の拠点で、その主要ポストにはイギリス人やイギリス系アイルランド人が就任していた。キルデア通りにはそうした人々の社交クラブ(「二人の伊達男」)があり、アイルランドの土地の半分はそこで行なわれた伊達男たちのギャンブルで動いたとさえ言われている。

### イギリス支配下のダブリン市民

こうした状況下、ダブリンの市民は、上流、中流の上層、中流の中層、中流の下層、労働者階級という5つの階層に分かれ、ピラミッドを形成していた。そしてこの階層秩序の大きな要素となっていたのは、職業とともに宗教である。英国国教会を中心とする支配者階級であるプロテスタントのイギリス人、あるいはイギリス系のアイルランド人が上の2つの層をほぼ独占し、土着の被支配者階級のカトリックたちは下の3つの階層に集中していた。

支配者階級は貴族、地主、総督府の高官、英国陸軍の最高司令官などで、その頂点に立つのがアイルランド総督である。フィーニックス公園の公邸に住み、権力の中枢であるダブリン城の総督府で政治を司った。だが、総督はどちらかと言えば象徴的な存在で、実際の権力は長官と次官が握っていた。彼らは総督に助言を与えるだけではなく、軍隊や財政を除きアイルランドの政治全般の責任も担っていたのである。そして長官は閣僚であることが多く、ロンドンとの間を往復することが多かったのも、より正確に言えば、次官が総督府の実質的な責任者であったとも言える。1904年当時、アイルランド総督であったのはダドリー伯爵ウィリアム・ハンプル(10.1176)、長官はウィンダム法で有名なジョージ・ウィンダム、次官はアントニー・パトリック・マクドネルであった(16.1666)。

総督の存在はマイラス慈善市のような公的な催しの他、毎年1月から3月にかけての舞踏会などでも知らされた。この時期は総督府を中心とするアイルランド全土の名望家たちの社交の季節であった。彼らはシェルボーン・ホテル、もしくはメリオン広場周辺の大邸宅に滞在し、夜毎に舞踏会などが催された。そのきらびやかさはムアの『モスリンのドラマ』に詳しい。彼らを見物するためにダブリン城の門前に人が群がり、コーレスなどの一流レストランに入るところを目撃することもあったし(「小さな雲」)、新聞の社交欄に関心を寄せる人々もいた(第13挿話)。ブルームも彼らを劇場で見かけたことがあり、さらにつてを利用してそうした総督のパーティに潜り込んだことさえある(第8挿話)。

総督府には約40の部署(アイルランド関連の仕事は29の部署)があり、その管轄の下、1914年には2万6千人の役人がいて、全国津々浦々まで監視下に置かれていた。アイルランド警察のような司法に関わる組織だけではなく、郵便、救貧院、地主と小作人との間を取り持つ土地委員会、教育など人々の生活に関わっていた。次官のマクドネルを始めカトリックも少しずつ増加していたが、主要ポストにはイギリス系アイルランド人がついていた。

カトリックの人々はこうした支配者階級を「よそ者」(1.661/「二人の伊達男」と呼んでいた。ステイーヴンは「なまっ白い顔の種族」(1.166, 10.341)と敵意を示し、マリガンや「市民」は「イギリス野郎/サクソン野郎」(1.232/12.1191)と見下している。さらにイギリス人の多いベルファスト出身者に対する偏見もあった。ファリントンが雇用主のミスタ・アリンと敵対関係にあるのは、アリンが北アイルランドの出身者であるからである(「対応」)。同様にステイーヴンもディージー校長やジョージ・ラッセルをそれぞれ「アルスター」出身者(2.397)と「ボイン川の向こう側から来た男だ」(9.203)と呼び、彼らと一線を画している。両者の関係は水と油、白人と黒人ほどの差があったと言われている。

しかし、被支配者の間にも階級差があった。カトリックの人々がすべて一様であるわけではない。G・S・アンドルーズによると、ダブリンのカトリック教徒の階層は中流の上層、中流の中層、中流の下層、労働者階級の四つに分類され、相互の間には軽蔑や反感さえあったという。

まず中流の上層には専門医、法廷弁護士、大手の店舗経営者などがいた。これらの人々は市内中心部のマウントジョイ広場、フィッツウィリアム広場、メリオン広場あたりか、郊外のフォックスロック、ドーキー、キングズタウンなどで暮らし、プロテスタント系イギリス人と親交を持ち、執事や御者などたくさんの召使を使用し、夕に衣服を着替えて晚餐(dinner)を取っていた。彼らは息子をイギリスのカトリック系の学校か、クロンゴーズ・ウッド・コレッジに入学させ、さらにはプロテスタント系のトリニティ・コレッジで学ばせた。また娘はマウント・アンヴィルの聖心修道院で学ばせ、ウィーンかデュセルドルフで磨きをかけさせた。これらの人々はイギリスびいきであったため、民族主義者たちから「西のブリトン人」(「死者たち」)、「城のカトリック」、「えせ紳士」(第12挿話)などと軽蔑された。彼らはゴルフ、ラグビー、クリケット、テニス、ホッケー、クローケーを楽しみ、都会的なイエズス会を好んだ。総督邸の園遊会やダブリン城でのレセプションに招待されることを夢み、イギリスのブライトンやボーンマスで休暇を過ごし、英国との連合を支持した。

中流の中層には一般の医者、事務弁護士、店と住居が別の商店経営者、穀物商、役人、新聞記者、石

炭商、銀行支配人がいた。これらの人々はそれぞれ料理、使い走り、乳母の役割を果たす3人の女中を置き、午餐を取り、夜は音楽を楽しみ、ブレイカスケリーズで休暇を過ごした。彼らは概して国民党の支持者であり、ローマ・カトリック教会の熱心な信者として家族して礼拝に出かけた。彼らは息子をベルヴェディアなどで、娘を聖心修道院かロレット修道院で学ばせた。彼らは事業が成功すれば、少なくとも子供たちは「城のカトリック」の仲間入りができると信じていた。

中流の下層には店の上階に住む商店経営者、店員、下級の役人などがいた。これらの人々は、午餐を取り、パジャマの代わりにシャツ寝間着 (nightshirt) を着て、羽毛布団で寝る。彼らはほとんど休暇を取らず、クイーン座のメロドラマかエンパイア劇場のバラエティショーを楽しむくらいであった。彼らはゴルフ、テニス、クローケーを女性的なもの、ラグビーをプロテスタントや「城のカトリック」の専売、アイルランドのフットボールやハーリングを田舎的と考えていた。息子をクリスチャン・ブラザーズ校に入れ、娘をドミニコ会の修道院で学ばせた。彼らには家や店を持つ資本もなく、商店経営者は店の上階から移り住めるよう、また店員や役人は死ぬまでに家を所有できるように願った。彼らは一家の繁栄を息子に期待した。

そして最下層には労働者階級の人々がいる。彼らは一般労働者、波止場人足、石炭荷揚げ人夫、使い走り、女中などである。これらの人々は全体の約40パーセントを占め、印刷工など熟練工として定職を持つ人もいれば、サンドイッチマンのような日雇い、果ては乞食までいた。特に「下積みの10パーセント」(16.1225)は、定職があっても、生活はぎりぎりであった。劣悪な住宅に住み、酒場しか娯楽の場所もなく、フィーニックス公園の演奏を聞き、サッカーの試合を観戦し、夏に近くの浜で泳ぐ程度であった。子供を国民学校に入れたが、それも短期間であった。彼らの関心事は日々の糧を得ることであった。宗教心が熱く、来世での至福を祈った。

こうした基準に照らすと、ジョイスの作品の登場人物の大部分が中流の中層から下層のカトリックであることに気づくだろう。ブルームやスティーヴンの家もその例にもれない。ブルームの家は中流の下層で、彼は「シャツ寝間着」(17.2111)を着て寝ているし、現在はかろうじて掃除婦ミセス・フレミング(第6挿話)を雇っているに過ぎない。またスティーヴンの家は中流の中層であったが、今は中流の下層といったところである。その一方で、ジミー・ドイル(「レースの後で」)やマリガン(家庭などは中流の上層であり、また中流の中層に転落しているらしい法廷弁護士のJ・J・オモロイがおり、他方で、労働者階級に属する「使い走りの小僧だの女中だの」(6.318)、市内を徘徊するサンドイッチマン(第8挿話)、御者溜りの有象無象(第16挿話)などがいた。

だが、階級は固定したものではなく、僅かながら時代は動きだしていた。産業革命後の鉄道網の整備に伴う新たな市場の形成により、教育の普及により、そして新しいところでは1898年の地方自治法案の改正により、カトリックにも生計を確立し、権利を主張する場もできてきた。高等教育を受けて専門職に就いたり、機転により新興成金になる人もいた。逆に、支配者階級たちも、土地改正法やアイルランド自治の要求の高まりに、自らの立場に安穩としていられなかった。さらに、流出入の住民もいた。

実際、市民は相互に意識的であった。プロテスタントとカトリックの間に隔たりがあっただけではな

く、支配者階級、中流、労働者という三階級の間に、そして中流相互の間にも、さらには中流の同レベルの者の間にも差異の意識があった。宗教、教育、衣服、行動、言葉、金、食物、家、趣味など階級意識の指標となっている。たとえば、『ダブリンの市民』で、ベルヴェディア・コレッジの教師は生徒に国民学校とは違うことを誇吹し（「出会い」）、労働者の食堂に入ったレネハンは客の視線を意識的し（「二人の伊達男」）、中流の中層に位置するゲイブリエルは周囲の人々に優越感を抱いている（「死者たち」）。ブルーム一家の生活や意識もこうした階級の対立を基礎に形成されているのである。

### 文化と無秩序

したがって、この時代は様々な力の共存と捉えるべきである。文化が断片化した社会の統制力になることを力説したのはマシュー・アーノルドであったが、この時代のアイルランドは、むしろ歴史家のライアンズが説くように、そうした均質な作用への反動であり、様々な力の共存である。スティーヴンも、マシュー・アーノルドを無秩序な喧騒が耳に入らず、芝（文化）を整える近視眼的な園丁の姿に重ね、彼の一枚岩的な文化批評をこう揶揄している。「あけ放った窓から聞こえる喚声の中庭の夕暮を驚かす。前掛けをした耳の遠い園丁がマシュー・アーノルドそっくりの顔をして、薄暗がりの芝生に芝刈機をかけている。踊り跳ねるこまかな草の茎を目を細めてみつめながら」（1. 172-5）。

したがって、カトリック対プロテスタント、アイルランド人对イギリス人という図式は短絡的すぎるであろう。民族主義者は往々にしてその図式に依拠し、自分たちの意見を正当化するが、19世紀末からの独立運動を先導してきたパーネルもイギリス系アイルランド人であり、プロテスタントではなかったか。逆に、カトリック教徒のほとんどが日常生活に埋没し、政治に無関心であったことも忘れるべきではない。さらにアイルランド全体として見ると、都市と田園、市場の開かれる街とその後背地、東と西、北と南といった文化の相違もあった。皮肉にも、イギリス文化こそ共通の文化ではなかったろうか。

イギリスとアイルランドの関係は、1801年の連合以降、産業革命の波と相俟って経済的にも文化的にも強まった。イギリスの製品が入り込んできただけでなく、イギリスのファッション、広告、書物、芝居、ミュージック・ホール、絵画、スポーツなどが広まった。そもそも18世紀末にメイヌース神学校が設立されてからは祭壇での言語が英語になり、1831年の公立学校の制度の確立により英語の授業が開始され、さらに1845年から始まる大飢饉を経験した後ゲール語人口が激減していた。英語は国民の言語になってきていた。英語は伝達の道具であるだけではない。英語で表現したり、英語で思考したりすることはイギリスの物の見方・考え方をも受け入れるに等しい。アイルランドは19世紀末までには、事実上、イギリスの文化的枠内にあったのである。

### 麻痺をこえて

にもかかわらず、この時代を特徴づける言葉は「麻痺」でもある。ジョイスはダブリンの市民を語るキー・ワードとして『ダブリンの市民』の冒頭の物語、「姉妹たち」の中でこの言葉を使用しているが、ロー＝エヴァンズの指摘するように、それは、ダブリンについてのジョイス個人の見方であるよりも、「貧

血」という言葉と同様、アイルランド全般を要約する言葉として既にあまねく社会に流通していた。ジョイスが時代の思想に共鳴したと言うべきだろう。

未来を見据えた地下水脈のような潜勢力もなかったわけではない。だが、いずれも人々の意識を目覚めさせるには十分ではなかった。宗教にしても、ローマ・カトリック教会は現実の生活から目を逸らせ、人々に人生を考えさせることをしなかった。また政治にしても、パーネル亡き後、政治家たちは方針を見定めることができないでいた。こうして自尊心のある多くの者が流出し、残された人々は精神的な「麻痺」に捕われていたのである。ブルーム一家もその影響から自由ではありえない。モリーが不義を犯すのも、ブルームがそれを制止できないのも、そうした時代状況と無縁ではないだろう。

かかる認識の下、ジョイスは、『肖像』の最後の場面で、主人公のステイーヴンに「魂の鍛冶場でわが民族のいまだ創造されざる良心を鍛える」と宣言させている。このツァラトゥストラ的な傲慢な身振りには作者の皮肉も込められていなくもないが、宣言そのものは作者にも共通する考えであったろう。むしろ問題なのは、「民族の良心」とは何か、またいかに「鍛える」ことが可能なのかということである。この課題も念頭におきながら、しばらくダブリンの時代状況を検討しておくことにしたい。

#### 参考文献

- Andrews, C. S. *Dublin Made Me: An Autobiography*. Dublin and Cork: Mercier Press, 1979.
- Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- Cameron, Sir C. *A Report upon the State of Public Health in the City of Dublin for the Year 1904*.
- Cheng, Vincent. *Joyce, Race, and Empire*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Cullen, L. M. *An Economic History of Ireland since 1660*. London: Batsford, 1976.
- Curtis, L. P., Jr. *Anglo-Saxons and Celts*. New York: New York University Press, 1968.
- … *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature*. Washington: Smithsonian Institution Press, 1971.
- Daly, Mary E. *Dublin The Disposed City*. Cork: Cork University Press, 1985.
- Daryl, Philippe. *Ireland's Disease*. London: Routledge, 1888.
- Douglas, Roy, Liam Harte and Jim O'Hara, eds. *Drawing Conclusions: A Cartoon History of Anglo-Irish Relations 1798-1998*. Belfast: The Blackstaff Press, 1998.
- Foster, R. F. *Modern Ireland 1600-1972*. London: Allen Lane, 1988.
- … *Paddy and Mr Punch: Connections in Irish and English History*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1995.
- Grousset, Paschal. *Ireland's Disease: The English in Ireland 1887*. Belfast: The Blackstaff Press, 1986.
- Humphreys, Alexander J. *New Dubliners: Urbanization and the Irish Family*. London: Routledge, 1998.
- Keogh, Dermot. *Jews in Twentieth-Century Ireland*. Cork: Cork University Press, 1998.
- Lowe-Evans, Mary. *Crimes Against Fecundity: Joyce and Population Control*. Syracuse, NY: Syracuse University Press, 1989.
- Lyons, F. S. L. *Culture and Anarchy in Ireland 1890-1939*. Oxford: Oxford University Press, 1979.
- … *Ireland since the Famine*. London: Fontana, 1973.
- McBride, Lawrence W., ed. *Images, Icons and the Irish Nationalist Imagination*. Dublin: Four Courts, 1999.
- … *The Greening of Dublin Castle*. Washington, DC: Catholic University of America Press, 1992.

Moore, George. *A Drama in Muslin*. 1886.

… *The Untilled Field*. London: Unwin, 1903.

O'Connor, Ulick. *Terrible Beauty is Born: The Irish Troubles, 1912-1922*. London: Granada, 1981.

Pierce, David. *James Joyce's Ireland*. New Haven: Yale University Press, 1992.

Plunkett, James. *Strumpet City*. London: Granada, 1969.

Potts, Willard. *Joyce and the Two Irelands*. Texas: University of Texas Press, 2000.

Shearman, Hugh. *Anglo-Irish Relations*. London: Faber & Faber, 1948.